

子どもの力を引き出す 園での信頼関係

遊びを通した学びの芽生えには、子ども同士、そして子どもと保育者の信頼関係が重要です。子どもにとっての「信頼」の意味と保育者の役割を考えます。

インタビュー ● 理論編1

信頼できる人や環境をベースとして 学びは芽生える

子どもが安心して園で過ごすうえでの基盤となるのが、園や保育者との「信頼関係」です。信頼とは、安心感や愛着とはどのように異なるのか。また保育者と子どもとの間、また子ども同士の間、信頼関係を育むには何がポイントとなるのか。東京大学の秋田喜代美先生にうかがいました。

安心感や愛着が土台にあれば、不安なときやトラブル時にも信頼関係は深まる

社会の変化に伴って 「信頼」がより重要に

子どもの学びの芽生えを支えるためには、子ども自身の、周囲に対する「信頼感」がカギを握っています。一般に信頼感、安心感や愛着などと混同して使われますが、これらを分けて考えることで、子どもを見取りやすくなるでしょう。

少し難しい言い方になりますが、信頼とは、「人や周囲の環境に対して期待して行動するための社会生活の基本」です。一方、安心は、「慣れ親しんだ閉じた関係の中における居心地のよさ」と言えるでしょう。信頼も安心もどちらも大切ですが、社会が複雑さを増し自分とは異質なものとかわる機会が増えてくる現代においては、信頼が一層重

要になってきていると言われてい

ます。というのは、昔は地域から出ずに知り合いだけとかかわって生きていくこともできました。そうした状況であれば特定の人や環境に対する安心感だけで毎日を過ごせます。しかし、現代はいろいろな人やものと出会い、適切な関係を築きながら、自分を形づくる社会になってきています。新しいものに出合ったとき、ベースに信頼関係がなければ、「これは自分にとってかわるべきものかどうか」という判断の基準をもつことができません。

子育ての場面を例にあげて説明しましょう。子どもが信頼している人、例えば母親や保育者から「これをやってごらん」と言われたら、最初は戸惑ったとしても、「お母さん



東京大学大学院教育学研究科
教授

秋田喜代美

あきた・きよみ

子ども・子育て新システム検討会議ワーキングチーム委員。著書に、「保育のみらい」(ひかりのくに)、「くらしの素顔—保育の場の子どもたち」(フレール館)など。

が言うのだから」と、新しいことにチャレンジしてみようという気持ちになるでしょう。つまり、保育者や友人などの周囲の人との信頼関係がベースになって、新しいものを受け入れているのです。同じように園でも、人や周囲のものを信頼できる環境をつくることで子どもの学びの芽生えを生み出すことができるのです。

安心や愛着を土台として 信頼関係が築かれる

「信頼の学習の基盤は幼児期に作られる(※)」と、ニクラス・ルーマンというドイツの社会学者は言っています。これは信頼が安心や愛着と密接に関係していることを示唆しています。まず土台として安心や愛着があり、その上に信頼関係が築かれていくのが基本的な形とイメージしてください。

特に乳児期の子どもは、母親や保育者との愛着が何より大事です。この時期の子どもは、自分の欲求を言葉にできませんから、それを保育者がくみ取って満たしてあげたり、欲求がかなえられないときでも抱きしめて安心させることで、子どもは「この人は自分を間違いなく支えてくれる」と直感的、本能的に安心し愛着をもち、信頼するようになります。

普通、乳児期は、他の子どもの遊びに長時間、興味を示しません。しかし、大好きな保育者が他の子どもと遊んでいるのを見て、「自分もやってみたい」とトライすることができます。これは、保育者との信頼関係が遊びの世界を広げていく例

子どもとの信頼関係を理解するポイント

◎安心感や愛着は信頼関係の土台となる

学びの芽生えを支えるには、子どもが保護者や保育者に抱く安心感や愛着が不可欠。そのうえに信頼関係を育むことで学びの芽生えが起りやすくなります。

◎信頼関係は遊びの中で最も育つ

子どもが興味をもつ遊びを提示したり、子どもが遊びの中で困っているときに手助けをしたりすることで、園や保育者に対する信頼感は高まっていきます。

◎一人ひとりの子どもに合わせた保育が信頼関係を深める

一人ひとりの子どもの育ちやテンポに合わせた保育により、子どもの気持ちや要求に丁寧に応えることで、しだいに信頼関係が深まっていきます。

と言えるでしょう。そのようにして子どもの遊びが広がれば、「明日も園に来たい」という期待がさらに高まります。それが園そのものへの信頼の第一歩にもなるのです。

遊びのきっかけの提示から 信頼関係が生まれることも

「登園しぶり」も園や保育者との信頼関係に深く関係しています。ある園では、子どもが門の前で泣いていると、保護者と保育者が話している姿を子どもに見せます。子どもが最も信頼する保護者が、保育者と親しげにしているのを見て、「どうやら大丈夫かな」という気持ちが生まれるのです。

園内に入ってきたけれど保護者と離れると泣いてしまう場合は、次

のようにして園に対する安心や信頼を育みます。例えば、「よい靴をはいているね」などと注意を向け、靴に少し砂を落として「園にはね、お砂があるんだよ、サラサラサラ……」などと話しかけます。すると、子どもは砂という特定のものに興味をもち、没頭することで不安を忘れ、「園には面白いものがあるそうだ。先生はお母さんとも仲がよさそうだし……」と、しだいに園に対する安心や信頼が芽生えます。

信頼関係がベースとなって遊びや学びの芽生えが起こるのが一般的ですが、この子どものように最初に遊びのきっかけを与えることで、それを提供してくれた人への信頼が深まるという逆のケースもあるのです。



※ニクラス・ルーマン『信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム』勁草書房(1990)

インタビュー ● 理論編2

子ども同士の信頼関係を援助して 子どもの育ちを支える

子どもたちの間に十分に信頼関係が育まれていれば、たとえトラブルがあっても、子どもは自分たちの力で解決していきます。クラス運営の基盤となる子ども同士の信頼関係を育むポイントについて、東京成徳大学の神長美津子先生にうかがいました。

子どもたちの力を信じながら、保育者は信頼関係構築の支援を

クラスに居場所があることが信頼関係の基盤となる

クラス運営における信頼関係の基盤になるのが、クラスの中に一人ひとりの居場所があるかどうか、ということです。子どもにとっての居場所は発達段階によって異なり、乳児期や2、3歳児は保育者との関係性の比重が大きいです。4歳児後半以降は友だちとの人間関係が深まり、周りの子どもが自分をどう見ているかがより重要になります。

そのため、子どもと保育者、そして子ども同士のかかわりをいかに育てるかが、クラス運営の肝と言えます。3、4歳児は言葉がまだ発達途上ですから、自分の思いを上手に

友だちに伝えられません。そういう場面で、「隣にこんな思いをもっているお友だちがいるよ」と保育者が伝えることで、自分と同じ思いや異なる思いをもつ子どもがいることを理解し、相手への尊敬や尊重の気持ちで育っていくのです。

友だちと一緒に世界を広げていく「協同的な学び」

信頼関係を育てるには、協同的な学びがポイントになりますが、協同的な学びの意味を取り違えている場合もあるようです。見た目の「協同」にとらわれて、単なる一斉活動になっているケースをよく見受けられます。本来の協同的な学びは、課題に取り組むときにひとりでは気づ

かなかったことに気づいたり、自分にはない友だちのよさを発見したりすることが本質的なねらいです。

もっとも子どもたちは、4、5歳児になれば急に協同的な学びに参加できるわけではありません。それ以前からクラスの中に居場所を感じたり、保育者との間に十分に愛着関係や信頼関係を育てておく必要



東京成徳大学子ども学部教授
神長美津子

かみなが みつこ
宇都宮大学教育学部附属幼稚園に勤務の後、文部科学省 初等中等教育局 幼児教育課教科調査官(国立教育政策研究所 教育課程研究センター-教育課程調査官併任)を経て、現職。実践的な視点で幼児期の発達と教育について研究する。



ば、帰りの会で「今日は面白かったですね」と一日を振り返って終わるのではなく、その日の遊びを踏まえて、「明日はこんなことをしてみようか」などと語りかけ、子どもに期待をもてるようにします。そうすることで、「園は楽しいところだ」という場への信頼につながっていきます。

子どもの心身の安定をはかる「養護」の側面とともに、「この先生はいつも楽しいことを提案してくれる」など、新たな世界を開く「教育」から芽生える信頼関係も大きく、それらは一体であることを覚えておいてください。

また信頼関係を育むには、一人ひとりの子どもの育ちに合わせた保育が重要であることも忘れないでください。保育者の力量や園の環境にもよりますが、子どものテンポに合わせて接し、要求にいていねいに応えることで、子どもの園や保育者に対する気持ちは深まっていくでしょう。

現場のみなさんへ
園は、子どもが大人になって社会で生きていくうえで不可欠な力を育てる場です。社会では自分とは異なる考えをもつ人たちが一緒に過ごしていくことになり、そのうえで周囲の人やものとの信頼関係はなくてはならないものです。信頼関係が最も育つのは、子どもが楽しく過ごす遊びの時間です。先生方にはこれからも遊びを大切に子どもを成長を支えていただきたいと思っています。そのようにして身につけた信頼関係は、子どもにとって生涯にわたる贈り物になると思います。

* 信頼関係を深める発達段階ごとのポイント *

- 乳児期** ◎愛着関係が何より重要です。子どもの心を満たして愛着関係を深めることが信頼関係につながっていきます。
- ↓
- 幼児前期 (3、4歳児)** ◎遊びがしだいに複雑になり、友だち関係も深まります。トラブルも増えますが、子どもの安全を守ったり、感情を受け止めたりする保育者のサポートで仲間同士の信頼関係は深まっています。
- ↓
- 幼児後期 (4歳児後半以降)** ◎子どもがさまざまな課題を解決するうえで、知恵を貸したり、手立てを講じたり、手助けをすることで信頼関係が育ち、深まります。次の遊びへの期待を膨らませるように心がけることも大切です。

楽しいときより不安なときに信頼関係が深まっていく

幼児期になると、遊びが複雑になり、友だち同士の関係も深まります。それに伴い、感情が高ぶったり、友だちとトラブルを起こしたりすることも増えるでしょう。信頼関係は、楽しいときよりも、むしろ不安を抱いたり困ったりしたときに生まれやすいものです。保育者が子どもの身体的な安全を守ったり、感情を受け止めて落ち着かせてあげたり、子どもを「助ける」存在になることで、信頼関係が深まっていくのです。

子ども同士が衝突したとき、「仲直りしたね。よかったね」と終わらせるのではなく、「○○ちゃんは、こういうことを言いたかったんだよね」と、お互いの意図を伝え合う代弁者となるのも保育者の大切な役目です。「自分の気持ちをわかってくれている」「公平に扱ってくれている」といった子どもの気持ちは、保育者への信頼に直結します。さらに、相手の意図を理解することで、友だち同士の信頼関係もできていくでしょう。

トラブルが起きたときは信頼関係を深める機会

4歳児後半以降は、遊びの中で課題を解決する場面が増えます。何かをつくりたいけれどもうまくいかないとか、ある子どもとうまくかかわりながら遊べないとか、さまざまな課題を解決するうえで、知恵を貸したり、手立てを講じたりすることで、子どもに新しい世界を開いていくのが保育者の役割です。ちょっと大げさな言い方かもしれませんが、子どもが「危機」に陥ったときほど、信頼関係を深める機会となると思っています。

4、5歳になると、遊びへの期待をつくり出すことも重要です。例え

があります。

幼児期における協同的な学びの体験は、小学校以降の教育につながっていきます。学びとは、未知のものとの出会い、それを受け入れ、自分の世界を広げていくことだと言えますが、これは独力では限界があります。友だちと一緒に何かをつくったり、解決したりする体験は、まさに学びの本質に迫るものであるわけです。

固定したグループだけでなく多くの子どもが接する場面を

そのような学びを成立させるには、子ども同士の信頼関係がベースなくてはなりません。子ども同士の信頼関係を育む援助には、いくつか重要なポイントがあります。

まず保育者が、子どもが表現することをしっかりと受け止めることです。言葉だけでなく、子どもが

えようとしている気持ちも含めて受け止めることが大切です。保育者のそのような態度は、子どもたちに伝わり、自然とお互いの表現を受け止め合う雰囲気が生まれます。特別なニーズをもつ子どもに対しても、保育者が気持ちを尊重して接することで、他の子どもも自然に接するようになります。保育者がいわばモデルになっているのです。

いろいろな子どもと出会う場面をつくることも大切な援助です。4、5歳児になると、好きな友だちと遊ぶことが増え、仲間関係が固定化します。仲良しのグループで存分に遊ぶのも大事ですが、固定化した友だち関係の中だけでは、一人ひとりの表現が限定される可能性があります。発言が強い子どもばかりが主張をするということも起こり得るでしょう。

そのため、当番活動などで他の子

どもと接する機会も大切にしてください。いろいろな子どもが接する活動では、それまでは見えなかった子どものよさが引き出されることがありますし、友だち同士でお互いにできること、できないことを認め合えるようになるでしょう。

一例をあげると、ある園で、主張の強い子どもがいたのですが、カメの世話の当番活動で、その子どもがカメをさわれないことがわかりました。他の子どもの中には、「〇〇くんは強いけど、カメをさわれないんだ」と、相手のことを理解するとともに、自分に自信をつけたケースがありました。

ただ、注意を要するのが、内気な性格などが要因で、クラスの中に5、6人ほどのような関係の中でも自分を表現できない子どもがいることです。その場合は、保育者が個々にケアする必要があるでしょう。



すべての子どもが 光り輝ける場面の演出を

一人ひとりの子どもが光る場面を演出することも、子ども同士が認め合う関係をつくるうえでは欠かせません。

その際に注意したいのが、逆にプレッシャーを与えないことです。なかなか自分を表現できない子どもに、「〇〇ちゃんは上手にできたよ。みんなの前で発表してごらん!」と言ってしまえば、子どもは負担を感じるかもしれません。保育において難しいことのひとつですが、保育者が一人ひとりのよさを見いだし、それをどのような形でみんなに伝えるかを、常に課題として考えるとういいます。

ある園に4歳で入園し、他の子どもとなかなかかわれない子どもがいました。その子どもが5歳の子につくった絵本が素晴らしかったので、クラスの図書コーナーに置くことになりました。すると、みんなにその子どものよさが伝わり、その子どもも自信をもって周囲に溶け込めるようになったという事例が

あります。

最近では、周囲の評価を気にして、4歳児後半くらいから劣等感を抱く子どもが増えているようです。少子化ということもあり、父母や祖父母など多くの人たちからの期待を受けることで、逆に自己発揮ができなくなっているのかもしれない。そういう子どもには、保育者が「あなたは、あなたらしくていいね」などと勇気づけてあげましょう。

愛情をもって突き放す援助が成長につながることも

5歳児後半になると、子ども同士が衝突するなどトラブルが頻繁に起きます。その際、保育者が一方的に導くのではなく、保育者が問題解

決のモデルとなったり、解決の視点を提示したりして、子どもたちの力で解決するように促すことが大切です。トラブル自体は大きな問題ではなく、トラブルの解決の仕方学ぶよい機会と考えるとよいでしょう。

そのためには、子どもの力を信じてはなりません。保育者が「解決しなくては」と前に出てしまうと子どもは引込んでしまいます。5歳児であれば、ときには突き放す、言い換えれば子どもに任せる援助を取り入れてください。子どもは自分たちで解決したことに満足感を得るとともに、任せてくれた保育者を信頼して、それまで以上にがんばるようになるでしょう。

クラス全員でひとつのことをやり遂げる体験も、一体感を生み出すうえで大きな効果があります。「自分はクラスの一人だ」と感じたとき、子どもはクラスの中に居場所を見出し、他の子どもや保育者への信頼関係が育っていくのです。

* * 子ども同士の信頼関係を育む5つの援助 * *

1 保育者が、子どもの表現していることを受け止める

言葉に出されたものだけでなく、何を訴えようとしているかを含めて、子どもの思いをしっかりと受け止める

2 いろいろな友だちと出会う場面をつくる

固定化されたグループだけでなく、いろいろな子どもと出会う場面をつくることで、一人ひとりのよさが引き出されやすくなる

3 クラス全員が光り輝く場面をつくる

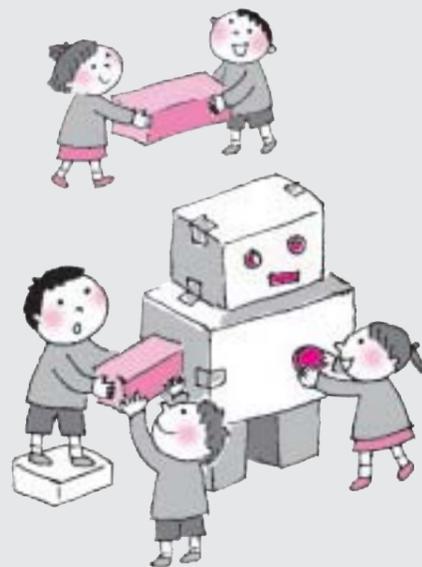
それぞれの子どものよさを見いだし、それをクラス全体に上手に伝えることで、子どもが自信をもつことができる

4 トラブルの解決はできるだけ子どもに任せる

保育者が一方的に解決に導くのではなく、モデルとなったり、解決へのヒントを示したりして、子ども自身が解決する場面を大切にする。そのためには子どもを信じて任せることが不可欠

5 みんなでひとつのことをやり遂げる体験をする

全員でひとつのことをやり遂げることで、「クラスの一人」であることを実感し、園や友だち、保育者への信頼感が深まる



現場の みなさんへ

トラブルが起こったとき、保育者がバツと解決してしまうのではなく、子どもを取り巻く人やものとかかわりを踏まえながら、解決を手助けすることで信頼関係はできていくものだと思います。そのためには、保育者が真剣に子どもと向き合うことは欠かせません。子ども同士の信頼関係ができあがって子どもがしっかりと育っていくことで、園に対する保護者の理解も深まっていくでしょう。